

【紹介】

「第1回国際子ども動物園シンポジウム」の概要

Summary of "The First International Symposium of Children's Zoo"

並木 美砂子*
Misako NAMIKI

1908年、ポルトガルのリスボンに生まれた世界で初めての「子ども動物園」以来、欧米や日本にも数多くの「子ども動物園」が誕生し、さまざまな形態をとってはいるものの、大きな動物園の多くにはこうしたエンクロージャーがいまなお健在である。

1987年、フィラデルフィア動物園の呼びかけで世界で初めて「子ども動物園国際シンポジウム」が開催された。とくにパブリックな出版物がないため、全容をあきらかにするにはシンポジウム参加者の報告のみがてがかりとなる。最近になって、ようやく筆者は各報告者のスクリプトを入手する機会に恵まれた。7年前の会議ではあるが、資料としての価値は高いと思われる。

全体は4つの分科会、29の報告からなる。参加者の出身地は欧米およびイスラエル、シンガポールである。全報告を取り上げるのは、スペースの関係で無理なので、各分科会の中で具体的な問題提起や資料的価値が高いと筆者が判断したものについて、以下にその概略を紹介し、今日の博物館活動の観点から、学べき諸点を筆者なりに整理したい。

1. 「第1回子ども動物園国際シンポジウム」の開催について

主催したフィラデルフィア動物園のキュレーター、ロバート氏はその挨拶の中で次のように発言している。

——ここにお集まりの皆さんは、動物園のキーパーやキュレーターばかりでなく博物館関係者、デザイナー、園芸学者、教育関係者、教育

委員会、そしてボランティアのかたなど、実に多岐にわたる分野のご出身です。この事自体たいへんうれしいことです。(略) これまであまり深くは省みられた事のない「子ども動物園」ですが、今日、状況は大きく変わってきております。単なる「可愛がり型動物園」から博物館のような「解説型動物園」への変革を来園者自身求めてきたからに他ありません。この変革に大いにチャレンジしようではありませんか。単に、通りすがりに馴れた動物に触れるだけの場ではなく、初歩的であろうとも、動物園とはどういう場であるかを語ることで一施設になるべきではないでしょうか。(略)

良い動物園とは、施設が立派であるとか、すばらしい動物のコレクションがあるとか、あるいは長寿記録をどれだけ持っているかで判断するのではなく、来園者に何ほどかの変化をもたらし、注意を喚起し、自然界の成り立ちをどれ程知ってもらったかで評価されるものではないでしょうか。(略) ——

子ども動物園の歴史は、そもそも人工哺育の野生動物の赤ちゃん動物を来園者に見せる事から始まった⁽¹⁾。それらは当初「小さな可愛らしい動物たちを集めた動物園」という事だったが、その後、アメリカでは「幼児のための」という意味で「子ども動物園」が開設されるようになった。日本では、上野動物園の一角に作られた「子ども動物園」が初めてであるが、その目的のひとつは「情操教育」であり、具体的には「子ども達の目を楽しませるかわいい動

* なみき みさこ

千葉市動物公園 〒264 千葉市若葉区源町280

物たちと、直接、触れ合える場づくり」ということであった⁽²⁾。

子ども達をとりまく社会の変化とともに、子ども動物園はもちろん、動物園そのものもいろいろな意味で社会的な役割を変化させ、社会に働きかけていかなければならない。動物園の変革はアメリカで60年代後半に始まったが、現在は「種の保存」と「環境教育」を二本の柱にして活動を展開し始めている。この流れの中で、子ども動物園も独自の変革に取り組もうとしているのである。

2. シンポジウムの発表原稿の概略

2-1 子ども動物園の展示動物

2-1-1 展示動物の返遷

L.E. Fisher

リンカーンパーク動物園

アメリカで初めて子ども動物園がここフィラデルフィア動物園で開設された。はじめのころは、家畜やペット、農場の典型的な動物、馴れた野生動物などそれこそさまざまな動物たちが展示されていた。

インディアナポリスでは地元の愛護協会と協力して、保護された捨てイヌや野良ネコを使った子ども動物園が開かれた事もあった。

50年代から60年代にかけて、輸入ペットの人気とあいまってたくさんの異国産動物たちが動物園をにぎわし、そのブームが去ると地方の動物園や子ども動物園にそれらが寄贈されるという経過をたどったのだ。

ロンドン動物園では昔からチンパンジーと来園者とのお茶タイムを設けて楽しんでもらっていたし、リンカーンパークでも子ども動物園の目玉として類人猿を置いた事もあった。しかし、ヒトから移る病気もあって、近年は子ども動物園に類人猿を見ることはない。

最近では、爬虫類を触れ合いの対象として取り上げている動物園も多くなってきた。水族館でも教育機能を兼ねた展示施設を設けているところが増えている。

全体としては、子ども動物園は来園者が直接、動物とコンタクトできる場であり続けているが、最近では安全に配慮した(動物と人間双方一筆者)教育プログラムを持つところが増えてきている。

2-1-2 水族館でのタッチングプール

Nancy A. Hutchikiss

バルチモア国立水族館

当館にはタッチングプールがある。最近こうした試みは増えている。

さて、「ここは触って確かめる展示です」—こう書かれていると、おもしろいことに来館者の多くは、「かみつきますか?」

「ほんものですか?」

「何をしているんですか?」

などと聞いてくる。だがその一方で、生きていない、つまり「標本」に対しては、いろいろいじくりまわしてたくさんの質問を職員にあげせる。

この大きなちがいをどう考えたらよいだろう。おそらく、普段身近な鳥や哺乳類に比べ、海生や淡水生の動物達はかれらにとって見慣れないからだろう。生きている実物と「乾いた」標本とで認知的な違いがどれほどあるかを調べる研究が現在進行中である。

タッチングプールの運営では、生き物達へのストレスを考えなければならないが、同時にこうした場の有利な点にも目を向けるべきである。十分配慮された扱いをしてもらい、水の世界への初歩的な誘いとして、このプールに勝るものはないだろう。

2-1-3 子ども動物園での「希少品種」

Gail Schneider

ドリハー動物園

家畜達が実際に人間の生活に役立っているところを展示するのは難しいが、その一つの試みに「搾乳風景の展示」がある。しかも我々の動物園ではそれに希少品種を用いている。

4本角のナバホヒツジやムスタング(北アメリカの小型のウマの品種一筆者)、搾乳牛のデボンキャトルなどを使うことで、つまり単に家畜の展示以上の、歴史ある品種を目にすることができ、家畜そのものにも強く惹かれるのである。

しかもこの希少品種の繁殖は、動物園運営上の財政にも一役かっているとも言える。

2-2 子ども動物園のデザイン

2-2-1 子どもの思考に合った動物園のデザインを

Janet Caplan

心理学者

私は動物園に関しては全くの素人だ。しかし、実際に3才の息子を連れてミネソタ動物園の子ども動物園を訪れてみたときの体験をベースに話をしたい。

動物に実際、触れることのできる場所の動物達は、3才の子どもが怪我をさせるほどの種類とは思えなかったが、かといってそれぞれの種類の違いを彼が理解できるわけではなかった。しかし、すばらしいことに、長い時間この場所で過ごす事ができた。

園内にはいろいろな質問板があり、「なぜウシは食べていないときでも口をもぐもぐ動かすのでしょうか?」とか「なぜヘビは脚がないのに動けるのでしょうか?」といった類のものだった。これは、多くの子供たちが持つ素朴な疑問なのだが、しかし園内にはそれに対する答えは直接には書かれていなかった。

そこで私は基本的な問題を提示したい。いったい子ども動物園の目的とは何か。展示は教育的であるべきか? 動物の生命について正しい記述をすべきであるのか?

私個人の少ない経験から言わせてもらえば、子ども動物園は「正確な記述」よりも「楽しさ」に重点を置いているようである。特に幼児にとって、ズラボなどの施設に幼児を連れていっても、設備をいじって壊してしまうのが関の山ではないだろうか。

大人向けには、さまざまなしっかりした教育プログラムがあるのに対し、子ども向けとなると、事情は突然19世紀になってしまう。19世紀、子どもは12才まで教育の対象とは考えられていなかったのだから。しかし、現在子どもたちはたいへん行動的な学習者であることが知られている。言葉を覚え始めたばかりの幼児は「ワンチャン」と言う言葉を覚えながら「イヌ」の概念を形成している。そして、どんなにチワワがネズミに見えても、チワワをイヌのカテゴリーに入れ、ラットはネズミのカテゴリーに入れることを知る。こうした概念は5才くらいまでにできあがり、やがて「どうしてヘビは脚がないのに

うごけるの?」の疑問に到達するのだ。この時、彼らの頭は「抽象化」が始まる。

実に子どもたちは年齢によって情報伝達のプロセスが大きく違う。しかし同時に子どもは大人と一緒にいてこそ情報をうけとることができることも事実である。学ぶ事それ自体、つまり学びかたを知るのである。

こう言いたい。例えば、国立公園のレンジャーたちが、わたしたちのいろいろな疑問に即座に答えてくれるような、いわばズーレンジャーを置いてほしい。かれらは心の底から仕事を愛しているように私には見える。

2-2-2 子ども動物園のデザイン

Janet McCoy

ワシントンパーク動物園

私たちの子ども動物園のマスタープランづくりは、1983年より始まった。以下に、そのプロセスについて紹介したい。

(1) プランニング上の共通認識

- * 生きた動物に直接触れることができる
- * 子どもが学習しやすい雰囲気づくり
- * 動物園ならではのユニークな体験を用意する
- * 子どもが想像力を発揮できる

(2) 議論を経て意見の一致をみた「必要な要素」

- * オリエンテーションのできる場所

* 通路

触れ合い広場への待ち時間を過ごすための場であり、同時に動物展示も見ることができるところ

* デモンストレーションのための広場

いろいろな動物を登場させ、楽しい解説ができるところ

* 触れ合い広場

動物に直接触れた後は、必ず何かを学んでもらいたい。その機能を備える。絵や模型も使い、動物と人間の生活のしかたの違いや、双方の感覚の違い、すみか、エコシステムといった話題を提供し、考えてもらえるよう工夫する。

* クラスルームが過ごせる場

小さい集団にも大きな集団にも適応できる工夫をし、学校が使用しないときはオープンにす

る。

*動物を抱けるところ

家庭や学校で飼っているペットなどを扱う。

*トイレや休憩所

*子どもだけの広場

あちこちに散りばめられて、思い思いに遊べる

季節的に来園者に大きな変動があることを考慮し、柔軟な運営が可能な施設をつくるべきだ。人気のある触れ合い広場に入る人で通路があふれないよう、いろいろな学習室や展示館が入口を開けて待つような工夫を凝らす。学校からの来園者には別の入口を用意することが必要だ。

(3) 展示のしかたや飼育動物の種類を決める考え方

- *展示は子ども中心に考えられるべきである。
- *大人も子どもの心を持っている。家族と一緒に楽しめる展示を考えるべきである。
- *インタラクティブな展示がいい。
- *子どもの持っている知識とかかわらせ、「あ、そうか」、と目を開かせるものがある。
- *子どもがはしゃぎ過ぎないように工夫があるとよい。生き物達に繊細な心遣いで接してほしいからだ。
- *展示の配列に気を配る。活動的になるような展示は、動物と触れ合う場の前が望ましい。
- *来園者が自分の興味や関心を自覚できる配列を考えるべきだ。
- *飼育動物は、展示のみの動物、ある配慮のもとに接することのできる動物、自由に子どもたちが接することが許される動物に分ける。

(4) 結論

子ども動物園のプランニングの中心点は、様々な年齢構成の家族連れやグループに、「学習のための場である」ことをどうアピールするかであった。そこで、いわゆる学習のための場は他のエリアと区別することにした。触れ合いの広場は、「家畜」「都会」「農場」「野生動物」といった区画に整理され、各区画の間にオリエンテーションの場を設けた。飼育係りの介在のもと、オープンな調理場、動物を抱くことのできる場を設けた。

そして、付け加えるなら、展示替えのしやすい作

りをあらかじめ考える、動物との接触は奨励されるべきだが、攻撃的行動を許してはならない、思いもよらない動物を展示する、家族はもちろん、一人ひとりの子どもをターゲットにする、などが大切だ。

2-3 教育活動

2-3-1 世話を通して学ぶ

Peter Norreso Hasse

コペンハーゲン動物園

今日の子どもの多くは、身の回りの生き物達から学ぶ事がだんだん少なくされている。動物園の持つべき目標のひとつは、野生の生き物たちと人間との関係をよく理解してもらうことだと言えよう。また、学校の取り組みをフォローすることも大事である。

動物園教育は「何か実際に体験し、そこから学ぶ」ことにあるべきだ。多くの子ども動物園では家畜をその対象にしているが、私たちは午前7時半から正午までの「体験プログラム」をもっており、ここに参加すると動物の世話や餌づくり、動物の移動などに取り組むことになる。「餌」をテーマに、実際の作業のあとで時間をとって理論を学んだりもする。この体験による学習は、自分たちの毎日の生活の成り立ち、動物と環境の関係などについて深く考えるきっかけになるだろう。

2-3-2 子ども動物園の活動を支えるボランティア

Roger Hoppers

サンフランシスコ子ども動物園

AAZPA (全米動物園水族館協議会) はボランティアを次のように位置づけた。

- *それまでの経験や知識を動物園外から持ちこめる
- *自分の興味ある話題(例えば野生動物の保護など)を来園者に提供できる
- *スタッフの補助をして動物観察に関われる
- *地域の人々との橋渡しができる
- *来園者の楽しみを増して、リピーターを生むことができる
- *技術の習得の仕方によっては、スタッフの配置に影響を与える

私たちの体験を加味すれば次の事が付け加えられる。

- *新しいプログラムに取り組む際、ボランティアを組み込むことは必要
- *スタッフの援助があれば自らの能力開発にも取り組める
- *コミュニケーションが大切
- *それぞれの個人の能力向上に動物園は理解を示す事が必要
- *相互の援助関係が必要

私たちはボランティアをひとからげにしないで、それぞれ個人として見なくてはならない。そして、互いに共感をもって取り組めるグループづくりは有効である。つまり、個々人の動機はそれとして、組織的な対応も必要なのである。

サンフランシスコ動物園協会には現在600人もがボランティアとして登録されており、その多くがこども動物園にやってくるのである。とくに、ドーセントたちは学校で来る子どもたちへのサービスには欠かせない。また、コンタクトの広場やサマースクールでも活躍している。

さらに、ネイチャートレイルという場所では、協会の教育部門でトレーニングを受けた12才から16才の子ども達が、10か所に分かれて自分の担当を持ち、やってくる様々な年齢の子どもたちに働きかけている。

近年、多様なプログラムが取り組まれてきているが、ボランティア自身は、毎日決まりきった仕事をするよりは、新しい人がやってきていろいろ体験できる事を望んでいる。もちろん、達成できない事も多く、スケジュール調整もたいへんだが、「教育の目標は決して達成される事はない」という認識をもって息長く関わっていきたい。ボランティアの人々、私たちスタッフ、そして来園者のかたも、動物園を楽しもうと思っているのだから。

2-4 子ども動物園の考え方

2-4-1 ヨーロッパの子ども動物園を概観して

Lars L. Anderson

コペンハーゲン動物園

イギリスをはじめ、北ヨーロッパの子ども動物園を概観し、以下の事を指摘したい。

<ミュンヘン>

家畜展示が中心である。全体として伝統的な初期の子ども動物園の考え方を踏襲しているようである。

<バーゼル>

展示動物は主として家畜で、その点ミュンヘンに似ているが、バックとなる考え方は大きく違う。キーパーと子ども達は、顔見知りになっていっしょに動物の世話をするのである。バッジを胸に付けて、ポニーの世話や手入れをするが、これは見ている人にも心地よい。しかし、問題がない訳ではない。キーパーは子どもと動物、双方に気を配らなければならないからだ。だが考え方は素晴らしい。

<コペンハーゲン>

動物園教育部により1985年に設立された。子ども動物園の目的の最も大切な点は、都会の子どもたちと動物たちとの接近のチャンスを広げることである。この目的のため、家畜は最適だ。5~11月のシーズンには、インストラクターが少なくとも一名常駐し、動物を連れて園内を歩いてまわる。コンタクトのできる広場にはヤギをおいているが、この場所については注意ぶかい実験観察が行なわれた。ヤギに触れるか触れないかは、子どもとヤギの年齢に関連していた。コンタクト自体の時間はせいぜい30秒程度が平均であった。これは、動物へのストレスに問題はない事を示している。むしろ、ヤギどうしのこぜりあいの方が問題になるほどであった。

ウサギについては、ワレン(ウサギ巣穴を含むすみか—筆者)をつくってあって、子どもが自分でそれを体験できるしくみを作っている。突然天敵にであうとか、餌の場所を捜せるなど。この理念のもとになっているのは、「子ども達は遊びながら学ぶ」という考え方だ。遊びの中で、基本的な生物学見方を学ぶのだ。——

この他、いくつかの子ども動物園を視察し、全体として、伝統的な子ども動物園から、「家族」をターゲットとした「みんなで楽しめるセンター」に変わってきているという印象をもった。展示動物のほとんどは家畜であり、それはあまり変化がないが、それは、子ども達が扱いやすいからである。しかし、子どもは野生動物に触れるのと同様の興奮を家畜に対して味わうのである。様々な趣向が凝らされた

子ども動物園を見ていると、なぜ動物園そのものが「家族のためのセンター」にならないのかと思わずにいられない。

2-4-2 伝統から変化へ

Robert M. Callahan

フィラデルフィア動物園

動物園の本流から見て、子ども動物園の存在はこれまでまったく別の次元であり続けてきた。「ベイベー、ペットズ」がその基本であった。

しかし、来園者が「学ぶ経験を持つ」ということは子ども動物園にもできることである。ここフィラデルフィアでは、それまでの回顧的な動物展示から「人間と動物との関係を問い直す」展示へと変化を見せ始めた。今日、「教育」は子ども動物園の「義務」となった。単に、動物に餌を与え、調教された動物で楽しむのはもはや受け入れ難い。例えば、生きている動物たちに初めて触れる経験を許すことで、生物学の初歩や動物のケア、さらには自然の保護や保全について知ってもらうことができるのだ。

子ども動物園のチームワークで、ひとびとの自然観を変える事ができると信じている。

2-4-3 子ども動物園の運営基準

Gail Schneider

ドレハー動物園

子ども動物園の運営に必要な各要素とその基準を考えてみたい。子ども動物園の本質は、「じっくりと間近に動物を見る事ができる」点である。この特徴を生かして可能性を考えよう。

(1) 財政 子ども動物園独自の予算体系を持つ。親動物園の財産として位置付ける。

(2) 人 無償のボランティアと有給の職員の問題。どの職員も一定の「動物の知識」と「話術」が必要だ。仕事の分担は明確であると同時に柔軟さも要求される。

(3) 来園者サービス 売店や食堂、トイレやベンチ、日除け、解説板、職員配置などを来園者、とくに子どもの目から見直そう。

(4) 動物管理 展示だけでなく、動物のケア自体を見せ、来園者に働きかける。また、個々の動物の行動観察により、攻撃的行動のチェックは必要で

ある。動物のローテーションや週2回程度のオフも考えるべきだ。

(5) 展示 来園者の行動を観察し、ネガティブな声にも耳を傾け、評価をする。

(6) 催し物など 新しい来園者の開拓に必要。子ども動物園の家畜はまさに「野生動物と人間」を語るのに最適だ。人間の存在を可能にした彼等の重要性にも触れることができる。絶滅に瀕した動物たちの事を扱うのも決して重くはない。

(7) 園外プログラム 子ども動物園は園外プログラムを是非持つべきだ。どんな動物を使い、だれがそこに参加するかを熟慮し、その基準を作る。意外な副産物をもたらすかもしれない。

(8) サイン 各子ども動物園の特徴が現れる。いまだに、間違った解説を見ることがある一方、親子の会話を促すものもある。サインや印刷物は、子どもの創造力を開拓するものでありたい。シンプルさ、そして幼児には各々の動物の「呼び名」も魅力的だ。

(9) 教育 みなさんも教育される必要がある。子ども動物園の教育は、皮膚や全感覚を通して無意識のうちになされるべきだ。子どもを連れた大人はその子を動物学者に仕立て上げようというわけではないのだ。しかし、動物たちの自然界における位置や人間との関わりについて知りたがっている。

以上を達成して、子ども動物園は独自の立場を完璧に整えることができるだろう。

3. 全体を概観して

このシンポジウムにおける発表論文を概観し(紹介できなかった原稿も含め)、筆者なりにまとめてみると、次のようになる。

3-1 動物の種類と構成について

アメリカでは、子ども動物園が「特殊な場」ではなく、動物園組織の中の一分野としての機能を持たせようとする意図が感じられる。その考えかたを展示動物の種類と展示法に反映しようとしている。具体的には、家畜展示はあくまで「人間の生活との関係」に基づいており、野生動物は保護の対象として生かそうとしている。それに対し、北ヨーロッパでは、家畜展示を主としながら、「世話」や「利用」

に重点を置こうとしている。

3-2 教育活動について

アメリカはボランティアの活躍に非常に期待をしており、ボランティアを単にマンパワーとして位置づけるのではなく、ボランティアの育成に組織的に取り組もうとしている。ヨーロッパは動物園の飼育職員が教育活動を兼務する機会が多く、来園者に積極的に働きかけるといふより、サインデザインや解説の内容に力をいれているようである。また、「動物の世話」を来園者、とくに子どもたちといっしょに取り組む園があるなど、各動物園の独自の伝統のようなものが生きているようだ。

さらに、教材整備という点では、ワシントン国立動物園の「ズーラボ」の取り組みが群れを抜いている。もちろん、各動物園の教育担当者はオリジナル教材の開発や整備に力を入れているが、この学ぶべき点は、学習者の「何かを学ぼうとする心理」をよく研究しているところだ。つまり、誰のための、何を学ぶための教材かをよく検討して、作成のプロセスを大切にしているのである。

子ども動物園における教育活動の検討では、とくに児童心理学者からの問いかけがその糸口を与えていた、

3-3 将来に向けて

ここには直接紹介できなかったが、ニューヨークのブロンクスの子ども動物園を新しく開設するにあたっての、職員相互のディスカッションが会話形式でそのまま紹介されているスクリプトがあった。要するに限られた財源のなかで最も大切にすべき機能は何かということなのだ。しかし、そのディス

カッションには結論は出ていなかった。はっきりしたのは「子ども動物園は教育活動の拠点のひとつだ」という点で、「楽しめる」のは教育活動をまじめにすすめるからだ、ということが互いに確認されていた。この報告が示した「結論でない結論」は、子ども動物園の現在と将来をそのまま表している。つまり、ゴールのない、日々新しい取り組みがよどみなく続けられていくこと、そして常にディスカッションが必要だということである。

よきにつけ悪しきにつけ、動物園そのものの歴史の上に、子ども動物園はその歴史を重ねてきた。ある時はペットや野生動物の赤ちゃんで子どもたちの注意を引き、ある時は捨てイヌや猫の避難所となり、またある時は疲弊した野生動物の暖かい保護の「囲い」でもあったのだ。やがて動物園が自らの機関を「自然の保護に寄与しよう」という崇高な理想に目覚めたとき、子どもたちに何をなぜ感じとってもらべきなのか、そのための手だては何かということに、子ども動物園は真剣に取り組もうとし始めたのである。将来、子ども動物園がどこへ行っても何か同じような施設になる必要はない。その地域の子どもたちが、あるいは家族が、動物たちの暮らしぶりから何を学び何を感じとるのか、また、学んでいる子どもたちの姿から、逆に私たちが何を学べるのか、それを交流できる場ができることを望みたい。

文献

- (1) 遠藤悟郎 「子ども動物園」 1978 フレーベル館
- (2) 千葉市動物公園協会 「不思議の国のZOO」 1994 ひとりなる書房

(1995年1月30日受理)